令和５年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

1	評価領域	教育環境

①	重点目標	感染症予防の徹底等、安全・安心な教育環境の確立	P
②	現状	・毎日の教室や教具の消毒、職員と児童生徒の食事場所を別にするなどの新型コロナウイルス感染症対策を実施している。感染拡大時の対応を立案し、職員間で共有して感染の拡大防止の準備を整える必要がある。 ・医療的ケアに係るインシデントがいくつかあり、反省を活かして対応策を検討、関係者での共通理解を図っている。	
③	具体的な目標	・児童生徒が安心して学習に臨めるよう、日常的に保護者及び主治医との情報共有を確実に行い、体調管理に努める。 ・医療療育センターや医療関係機関との連携を密に行い、感染症対策や医療的ケア児の緊急時対応等、危機管理体制を整備する。	
④	目標達成のための方策	・日常的な予防対策と感染症予防教育を徹底する。 ・警戒レベルや感染状況に応じた対応策を策定し、関係者間で共通理解する。 ・複数の場面を想定したカニューレ抜去時の緊急時対応訓練を実施する。	
⑤	具体的な取組状況	・新型コロナウイルスが「５類」へ移行したことによる、学習場面ごとの対応指針を作成し、随時医療療育センターや学校医の助言を受けて、感染拡大を予防する手立てを講じながら、全校行事や修学旅行等を実施した。 ・カニューレ抜去時等様々な場面を想定して、緊急時対応訓練を学部ごとに実施した。	D
⑥	達成状況	・新型コロナウイルス感染症対応については、学校医のご指導をいただきながら、対応を行ったことで、感染拡大は最小限に抑えられた。 ・年度当初に繰り返し緊急時対応訓練を行ったことで、いざという際には適切に対応することができた。	D
⑦	自己評価	（評価）A （根拠） ・児童生徒、職員、保護者の感染症対策意識が向上した。 ・学習集団の柔軟な変更、ICT の活用等により、児童生徒や職員の陽性発生に迅速に対応し感染拡大を防いだ。	C
⑧	学校関係者評価と意見	（評価）A ・感染症予防はもとより、医ケアの実施も含め、安全･安心な教育環境の確保への努力に敬意を表します。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・感染症対策について、職員と職員会議等で共通理解を図り共通理解を図る。また、家庭にも保健便り等で呼びかけて確実に実施する。 ・インシデントだけではなくヒヤリハットについても、当事者間で迅速に振り返りと反省を行い、対応策を関係者で共有し再発を防ぐ。	A

↑
↓ 評価基準　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

令和５年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

2	評価領域	教育課程

①	重点目標	カリキュラム･マネジメントの推進と児童生徒主体の授業改善	P
②	現状	・教科横断的な内容を意識する必要がある。 ・児童生徒は日常的にICT機器に触れる機会が増え、授業への活用は徐々に広がりつつある。 ・感染症への予防対策を考えつつ、指導内容や指導方法の見直しが行われている。	
③	具体的な目標	・学習指導要領に即し、児童生徒の実態や教育的ニーズに応じた教育課程を全職員で検証し、改善を行う。 ・ICT を積極的に活用するとともに、肢体不自由教育及び病弱教育の専門性の高い授業を実践する。	
④	目標達成のための方策	・類型チーフ会で進捗状況の確認と情報共有を行い、類型毎に教師間の共通理解を図り、「課題の明確化→改善策の検討→授業実践→評価・改善」を行うとともに、授業研究会で成果と改善点を明確にする。 ・ICT の活用に関する職員研修を実施して職員の ICT 活用能力の向上を図るとともに、様々な場面で ICT を活用した授業を実践する。	
⑤	具体的な取組状況	・定期的なミーティング及び類型チーフ会では学習内容を検討し、授業や年間指導計画に反映した。また活発な意見交換が行われ、成果や課題が明らかになった。 ・定期的に ICT に関するミニ研修会を実施し、多くの職員が積極的に受講した。研修会では、授業への活用方法を広げるための基礎･応用知識を学んだ。	D
⑥	達成状況	・グループ研究会を月１回実施し、授業づくりや教育課程について検討することで全員が授業づくりや授業改善に携わった。 ・情報教育部が中心となり、多くの職員が授業に ICT を活用することができた。また、様々な機器の授業での活用、遠隔操作ロボットの活用、課外クラブ（e-sports）の活動、他校との交流、作業学習製品販売会での地域住民との交流など、多様な取組を行った。	D
⑦	自己評価	（評価）A （根拠） ・年３回の教育課程検討委員会において PDCA にもとづき、全職員で教育課程の検証と改善を行った。 ・ICT について、各教科等のねらいに応じたアプリや機器の積極的な活用等により表現力の向上につながり、着実に推進できた。	C

↑
評価基準　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
↓　Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

⑧	学校関係者評価と意見	（評価）A ・一人一人の教員がカリキュラム･マネジメントの趣旨を理解し、「自身、何を、どの様にする」ことが求められているのか、明確にする必要がある。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・引き続き、全職員で共通理解しながら、カリキュラム・マネジメントを進める。 ・ICTについては、ただ操作を楽しみ親しむ段階から、より学習効果を高めるための活用につなげられるよう、教師の活用能力を高める研修や情報共有により、授業の質を高める工夫を行う。	A

令和５年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

3	評価領域	生き方指導

①	重点目標	キャリア教育の充実と生涯学習につながる資質の育成	P
②	現　　状	・本校高等部卒業後の生き方に関して、自己選択･自己決定をするための学習が十分ではない。目標設定の明確化、各教科間の関連、評価の在り方が課題である。 ・感染症拡大防止対策のため、合同学習や校外学習等の体験学習が十分に行えない状況にあったため、現場実習や直接体験、交流の場が少なくなっていた。	
③	具体的な目標	・保護者や関係機関との連携を図り、小学部から高等部までのライフステージに合わせた生き方指導や進路指導、発達段階や実態及び家庭環境に応じたキャリア教育を行う。 ・児童生徒の実態や興味･関心に応じ､日常的に生活を豊かにするための経験を重ね、多様な人や環境と関わる機会や、外部との交流の機会を設定する。	
④	目標達成のための方策	・児童生徒一人一人の進路希望やニーズを確実に理解し、目標やめあてを意識した、児童生徒主体の学習活動を実施し、評価する。 ・ICT を活用して授業に取り入れ、主体的な取り組みや表現力向上につなげる。 ・情報提示や研修方法を工夫して、保護者や職員のキャリア教育理解を深める。	
⑤	具体的な取組状況	・年度当初に進路希望調査を行い分析することで、児童生徒一人一人の教育的ニーズを具体的に検討した。 ・アバターロボットによる遠隔作業学習製品販売、ｅ-sports体験を実施した。 ・生涯学習センターと連携し、青年学級を校外やオンラインで実施した。	D
⑥	達成状況	・キャリア教育や進路に関して小・中学部の保護者が進路関係の掲示を興味深そうに見る場面が多くなった。 ・様々な形態の青年学級の実施により、卒業生が会い、楽しみ、仲間を増やす機会を創出できた。	D
⑦	自己評価	（評価）A （根拠） ・保護者からの進路関係の問い合わせが多くなるなど、関心が高まった。 ・ICT を活用し遠隔で多様な人との交流や経験を促進するとともに、活動の幅を広げ、主体的に活動する姿を引き出すことができた。	C
⑧	学校関係者評価と意見	（評価）A ・生涯学習の取組が、学校卒業後の学びにつながっているか、検証してください。 ・キャリア教育の視点を大切にして、卒業後の学びや生活等につながる生涯学習のあり方について深めてほしい。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・児童生徒が、さまざまな人と関わり合い社会参加するためにICTの活用や関係機関との連携を深める工夫を行う。 ・児童生徒が自信の将来について見通しをもち、自己選択･自己決定していけるような学習の工夫と実践を進める。	A

↑
↓ 評価基準　Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

令和５年度　秋田きらり支援学校あきた型学校評価

4	評価領域	センター的機能

①	重点目標	病弱教育サポートセンターを含むセンター的機能の拡充	P
②	現状	・病弱教育アドバイザー及び教育専門監等が、２５市町村教育委員会、１６高等学校に訪問し、病弱教育サポートセンターきらり☆のスタッフが３園９校１６回の学習等支援や、６病院で２１名に対し２２０回の学習支援等を行った。 ・特別支援学級設置校訪問は、２１校からの希望があった。	
③	具体的な目標	・医療療育センターと連携しながら、病弱教育サポートセンターきらり☆の充実を図り、肢体不自由教育及び病弱教育のニーズに応じた支援を行う。 ・発達障害者支援センター（ふきのとう秋田）、医療的ケア児支援センター（コラソン）、及び外部機関との連携を図り、切れ目ない支援体制の充実を図る。	
④⑤	目標達成のための方策	・医療療育センターの連携ケース検討会や育成部面談で情報交換したり、特別支援学級設置校の担任や学校の悩みや課題を聞き取り、本校の取組を紹介したり、全県の教職員を対象に研修会を実施したりする。 ・関係機関との情報共有や支援の共通理解を図る。 ・病弱教育サポートセンターきらり☆の支援内容等について行政・医療・教育の各機関に周知するとともに、効果的な情報発信等ニーズに応じた教育活動支援を行う。	
⑥	具体的な取組状況	・医療療育センターと連携しながら、連携ケース検討会や育成部との面談を企画・調整した。また、「放課後等デイサービス事業所との情報交換会」を実施し、関係機関との情報共有や支援の共通理解を図った。 ・市町村教育委員会や総合病院を直接訪問し、病弱教育サポートセンターの支援内容等の周知と併せ、地域の状況についての聞き取りを行い、実態把握に努めた。	D
⑦	達成状況	・病弱教育アドバイザー及びコーディネーター等が、２５市町村教育委員会、１６高等学校に訪問し、病弱教育サポートセンターきらり☆のスタッフが３園９校１６件の相談支援等や、６病院で２１名に対し１０３回の学習支援等を行った。	D
	自己評価	（評価）A （根拠） ・対面とオンラインを組み合わせた研修会や、少人数のオンライン相談「きらりサロン」を初めて実施し、各校担当者の専門性の向上を図った。 ・市町村教育委員会、総合病院、学校と連携して、情報交換・検討会を実施するなど、迅速にニーズに応じた支援を行うことができた。	C

↑ 評価基準 ↓
Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた　Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

⑧	学校関係者評価と意見	（評価）A ・医療機関等と連携して、適切に取り組んでいるように思います。 ・R6年度から大学病院における学習支援について、子どもの入院期間の長短を問わず、シームレスな支援ができる「秋田モデル」の構築を期待する。	C
⑨	自己評価・学校関係者評価に基づいた改善策	・「きらりサロン」は年間計画を提示するなど積極的に周知を図り、オンラインも活用しネットワークづくりを進める。 ・入院児童生徒の円滑な復学を目指し、ICT機器を活用して実施する。支援に当たっては、関係者間の円滑な連携により、在籍校が主体の支援となるよう配慮する。 ・秋田大学病院内に設置する「サポートルーム」が円滑に機能するように、関係者や関係期間との連携を深めて、実施する。	A